

柳沼さんの心のうえで、そしてけいぎい上のご苦労はたいへんなことであると思う。柳沼さんは社会の恩人^{おんじん}であり、またよい仕事を残していることからみても、尊敬^{そんけい}できる人であると思う。」

と書いて、源太郎さんをほめたたえております。

柳沼牡丹園は、昭和七年文部省から史跡^{しせき}名勝^{めいしょう}天然記念物^{てんぜんきねんぶつ}として、指定をうけました。それは、江戸時代から牡丹のなえを育てることと牡丹の花の優秀^{みと}さが認められたからでありました。

さてここで俳人としての、柳沼破籠子^{はろうし}の俳句をふりかえてみましょう。

大正十一年七月に、俳句を愛する人たち九人で「桔槔^{きつこう}」という俳句の雑誌をつくりました。破籠子はその中心人物になりました。「桔槔^{きつこう}」というのは、はねつるべのことです。はねつるべとは、むかしまだ水道のなかつたころ、井戸^{いど}から水をくみあげるとき使ったしかけのことです。

つまり、「桔槔^{きつこう}」というのは、つねに新しい水をくみいれようという意味があり